



真角叢句集

^ 5
4310
2





其角發句集

秋之部

坎窩久感

文月也 伝と感と 蚊屋の中

詞書畧

空や妹蚊屋哉 心連く 七多羅樹

乃めしきや 霄曉 孤舟志先

父の如く 心と心 空と空 暮と暮

此句と申すれハ一折るるほく 亦快し

いよと昔より妙威の所ありこころ志るは
 秋の風のそよぎたり

拾枝亭柱のくま

乾ヤ兌 坎 震 離 艮 坤 巽

そよや秋のそよぎり

下字自然にまじりて

殊夜話隠林

雨次月羽織や

夕夕や暮るる

七夕や暮るる

下

星合女の牙の痕の瓜のつら
 比叡の身の影のり
 九腰の志の治郎笠の星の影の入
 二星のくまの隣の影の入の年の十の五

雨後

静かな夜おき〜花橋も
う〜静かな鳥も山道夕か〜
露橋やま何〜宇治の星姫も
あ〜支や丸太路〜魚片〜川

新居

堀梢かき〜あ〜や 銀河
あ〜川〜あ〜や 一志母
弄化生
あ〜子字ル〜あ〜天の川

二

栢買う、山崎川流もや あ〜路所
大切なる教も 明平〜り〜の川

素堂、母七十七歳の笑歌煉七字

星の束よ 花火紐〜〜あ〜の
妻星よ あ〜一〜を 山崎女
う〜星 礼賀子 山崎女 女所を
首屯や 角豆心 星乃玉う〜
あ〜や 歌平 山崎 鞠印く
二挺立 帰棹
あ〜と〜く〜の〜〜 星の束

女にさす金の心とくく筆電ふもあふ
侍る哉七夕のま向ふにさくく
露の川を味増うくあせく蟋蟀
七夕歌尽しあこわあ子残
ゆふかり 数くくくくも 露るふ傘
三遷のともく慣ひく七夕くありける
姪と寺のありきこれ一日ありく七夕
あぢをあらうあをわくわく
文月や老くくくも 母に思
井の節きくく相かき一 鳥の鳴

水虫蜘蛛ひら糸よわくくおとくあ
肅山子れりや皇の画よ
きくくぬ相の一糸や皇にさ
字危に水のきくく位に糸糸侍とさひて
手拭糸の筐さうりり糸 糸と糸糸糸
錢肅山子
のあくと待伊子糸廉もかろし桐の糸
きくく節や風あく懐糸糸一葉川
糸糸糸くく糸く糸糸糸糸糸糸奉りて
あきくく糸糸仙洞様哉いのちく糸

釣魚牙志何れ一人や鬘帽子
あき顔やされぬいよはく猪口の物
胡かおふまゝこゝろとや水れその
阿きのおやも〜見え人無亦格子

さしこいぬおけおけけ物の讚

釣う何や穂百出さあ〜這あうね
葦片りきあかぬ尻の二葉おれ
あき顔ふつ川宿出〜序使
殊あ〜雷胡魚ふいさ記〜
阿きかお死日陰ま〜あり中老女

下 四

暮暮舞〜ゆふ歌を

あきお何ふ急ちるま〜の夕うね
乃心お妻志あま〜恨む 撞 垣

市隅

西側牙籠 籠あ〜れや三日の月
美女美男 灯籠よ〜寺 迷ひうぬ

増上寺晚景

る老ぬ燈籠使老 道〜〜無
えり人ふりり 灯籠牙 出りきり
遊山火と世思の義ふ〜もやたは近

ふくふくかのかのちの玉能夕極る那
たもちの借金乞身なるりけを

右二句文有畧

玉まつり門の乞食せん 親をせしむ
きれか〜人や隣のもめりまの

柳經とらん糸糸〜親し傍の袖〜おひ
ゆりそ落し〜糸のれ授記品の有無價
宝珠と鏡とあり心証ありひく

夜も銭〜も〜も〜も〜も〜も〜も
柳經やこ乃あつ山支能阿ふせん水

下
五

柳經や花れあふるき子坊を
送り火や定家の多あり 十文子
測り、隣あつ先や生勇〜海
生靈酒能下らぬ親又可ぬ

侍坐

〜鶴毛 廣間年羽とあり〜
文〜と〜刺躰就獵領し世の
人〜と〜子〜と〜

轉切其かく〜も〜も〜も〜も〜も〜も
親も子も〜も〜も〜も〜も〜も 蓮う里

陀羅尼品

銀鏡 形如月の如く墓中の玉

分郊原

みまの如く分限の如く體弱
小娘の如く生きたる如くかき
一巻を鏡とありしをわたりて

赤山をさめく

躍子にたりて以てく入 日星を
とりの如く書きたる如く酒を
伴勢の如く入りしをわたりて

千之し黄檗平あそよ
盆あとの如く種し山を二人の如

玉川の氷筋うまるとる如く

あはれき 曉 起 や ともあふあめれ
投し連く坊主なりしを過角力
とる衣如くし牙いやしやお撲し
トろや志如くしあめれく過ぎあふ
上手なりしを優美なり角力取
お撲をとる月代書より角力取
神の如く女もうれや 角力 札

壹面々屯火あきあきひりり代
 扇的总火くくく家 扈後の籠
 小屋凍し花火能筒のころり音
 移さぬも逆槽も屋も也屯火賣
 稻妻やまきの少きむうしくハ西
 妻子おられ後子ゆもれまら大町
 いぬのやありつもつも まるも
 稲妻や朝暎しきれを子又
 齋院能此戸さきしき年高なれ也
 和く然備くく能也や国 の 介

周信の瓢の画子

志く家も一升入世めくう那

石蔵寺對僧

手尔提し茶瓶やさめく答能家
 高能男也 沙芽々原へある子辰
 旁汝相めを急か者てす戸の浦
 宇治山水

川流りや茶立く何者能し加威
 中のめめく

幸清、旁能るもやまらし松

幸里小野の忠守承まつりき

芳雨無尾系りのよ 胡布もき
あきなり身一の多ねや 波孔言
吾の園やまをこ乃きし牙鳴海
差取よ 富士の芳差 志く連
新より如きを花 夢を 不二鹿
弥流のまはう城のまむりし
たのじしよこをくく結縁を
夏張るち有り 枚子をよふ 龍前う形
枚子のくきげをよふ 公うく

つちをききみんああり 庭能味

一つやうと女界

蘇も二飛 菩薩めくえし 上童

蘇原荊と 西瓜牙杖 借を男

文ハあく子界

もき 能高 蛤貝 糸くもて 哉

切悠亭めく

日笠 浅内 傘しとせ 蘇原 汗

曉松亭

獅子 能高の 胸分 子すれ 庭 蘇

ゆかりの池に 誰か内儀そとをきりし麻
仙石玉芙蓉は 加番子 餞別

蘇よと申すや 傘すしの 似せしは
専吟庵

蘇よと申すや 傘すしの 似せしは
二回系巻のり

白馬の 尾髪 吹と家すくはれぬ
召あつに ちかれし 子方や 蘇よと申す

在原寺のり
僧けき乃志つて 平むらうし 芒の 蘇

井筒と略志の系画子

いと秋のそ 舟輪ふもよふ 為うぬ
角文字や 伊勢の 形細の 意とてき

せよかき松
珠おぬや 為成 如きゆく 小松 系

二見あき
山石のうへり 神風きく 生れ 芒

沾徳餞別
点きつそ 大 船宿の 枕 志とて 記

守糸のり 娘市 為きとて 女郎 花

遍昭の讃

傍正よ 鞍々かへりて 女所 忌

一本 女裁とらふ事と

市城へき 何よ 女所とらふ事と

経冊のきききき 迷惑とらふ

首の紫乃あるは 色残はくみふれ

うれとらふ也 見様のさ先のまんゆきけ

茶釜のくくく の掃除也 白芙蓉

阿ふえれ 色蕉 丹のりそそききき

とを 残はくみ 若山角をくくく 兔

碧油くむ 小屋の棟也 翡翠のくみ

むしりし 佐助のくみ 志暮のくみ

酢をとあり 隣乃 葵のくみ 好さくみ

雞卵如 松平のくみ 清閑寺

たをくみ 山田のくみ 夕日くみ

名日くみ くのきくく 烟子のくみ

夢とらふし 骸骨をとらふ 萩のくみ

盤のくみ 男の推つて 女をくみ

西瓜くみ 奴の盤乃 なるくみ

西瓜くみ 吟を 安達くみ 原をくみ

山嶽々まゝに 清め形也 結西風
芋焼くゝて 雨と雪風の聲りり
や戸畑の芋 初るあや不伏猪々
嵐菊一子 孤懸と阿を連む
芋の子もとも 焼の味をちりり
尚芽々系

吉田氏

唐租も糸とくれ ぬれ手向の
角租と流し 習や水見舞

下 上

芦の穂や 蟹とや びくをりも
妓子万之 扇波々
折釘子 ころりや のこ糸 妹のきえ
兔籠の かしと 見つて 蝉乃ころり
ユコ菊とみ
そ人共 軒さへ ぬれ ありの 蝉
元父葬 送場みく
一蹴牙 蟬も 木蔭も 眠々 妹
頬摺や おもひ ぬれ 牙 虫 牙
元結の ぬれ 虫 牙

柴栗と伊勢越うらりく
 故心も 愛ゆり 長巻を 穿て 成志
 松中 糸狐を せんまきし 友り 船
 とむ月也 盤出たてく ちりくす
 了り 舟子 雲虫を の 浅茅を
 猫子 くれれ を 蟬の 妻ハ ちりく
 ちりく 也 松明を 火へ 荷ハ ちりく
 蜻蛉 也 ちりく 山 志何 ちりく 三日 ちりく
 山の 端と ちりく まる ちりく 也 破蓮 ちりく
 酒さ ちりく 蝨 ちりく ちりく ちりく ちりく
 下

酒買り ちりく ちりく ちりく 雁 孤心
 一 志何 妻も ちりく ちりく 天門 雁
 ちりく ちりく ちりく ちりく ちりく ちりく
 ちりく ちりく ちりく ちりく ちりく 雁
 題湯豆腐
 ちりく ちりく 雁 雁 雁 雁 雁 雁 雁
 隣家 ちりく ちりく ちりく ちりく
 大 結ハ 晒 ちりく ちりく ちりく 雁
 雁の 腹 ちりく 送 ちりく ちりく ちりく 雁
 ちりく ちりく ちりく ちりく ちりく 雁

冠里公の御成敗に記し祝なりと

初馬や臺ハ坊をれく百足持
品川も連子めつし 雁の急

自画

片足もやめし人し 小田の雁

詞書を畧す

陣中此飛脚もあぐや唇乃鳥
鳴くちくまひしまりのと鴨とくハ
江急の鴨耳 這るおゆの屋を那
順檢糸ともんうらり也 百舌れ夢

むさめ食持るる

賜啼也赤子も頬張吸さる可

感徴和尚子對す

そと打や鶉衣牙玉たさる

餞秋航

諸鶉 豹もまありを如後目かき

平家の妻と語る

あつり来く福原もむし鶉も

みつく乃改巾も入りぬをさる

木兎や百舎子ともうり中りる

仁多桑の片山かきや わくは荒

秋葉禪定下山

かききた杖を投ぐ家のやま
山花の戸めをきりえちの拍
春澄子と人稲負鳥とつるあり

小多のそ長奇

四十のく小東の中山 五十のく
中村少長夫婦連あへ上京さく時
山多も大哉くもむ 振る森のれ
はらうもおちの流る負かへりく

麻の一巻くも小多のさん子

更あこと誰のほきこゆく 蕨のく
さきしあや細むく急るう 世をこれ
木辻下や

門たちの袂くも人れ 男麻の那
小原女や紅葉くもく 麻の尻
合解急く志の牙もあや 妹葉を
着る此山 遠まきく のさく

自画賛

さき蕨やともを牙の待あへせ

新の節より縄を縄たふ小田の鯉
カシカバ夕然人ハ猿のあを釣
さつちよこ糸世我のあつさる鯉の那
遠州二股川を河のあめそ下り侍る牙
推河腹との糸逆水夫切所我越く
打擧平鯉ともつくり割の以路
小いりや一口茄子 巻糸の門
ほあしと胡飯あほよ根釣あま
さる雄あま
此秋夢又覚我をこころをうし

忌物あまうししとさるあまや妹のあ
あま山のあま二子あまああまあまのあ
木兔あまあまひらり笑ひや秋のくま
あまのくれ祖父のあまらえさあまそ
青海や浅黄子あまらえさあまの昏
寂蓮
和哥の骨模く山のかあまあま
あまのあまあ尾上の杉をえあまあま
鑑素堂秋池
風妹の荷葉二扇あまくあまあま

背面の建物を画く

武帝めを留守とくくよ妹の風

秋山や釣もゆれぬ鞍のこゑ

相摸川洪水落水接天

狼の浮木千のあやめあまのあ

あまの乃ん法外ハ修業ハ藤元也

野田玉川子西行上人死堀井あまはし

帰る井とあまのなうくり我を秋の阿免

工氣三回忌子智海師とともあひく

三人死あまのこゑとあまののこゑ

子子等には猫もかたぐいぬ我を我

酒りぬ酒を切取めして間を

あひとらや夜更とささのや藤入

悼朝雙

此人千二百十日身阿まのこゑ

春日法系

今我日あまの死あ結を春日か

砦の町妻吼る大あまの死

色蕉庐のあ

墨深を鉦鼓は隣るまあまの死

点取糸おこしむら懐紙のあへり
二毫平目をあはしむら砧五郎
みの路り入る
まゆこきあん 孫六屋敷 志津屋敷
あはむ老のりやあへり
中の間子 斎ぬ子 歳入さきあへり
和永新宅
さい樞 新多 越仕 舞へり 碓う新
銭青流 難波
蘆川のうらさを喰さくきあへり哉

雪の下あへり
あへり川 宿北庵子や 茶の路仕
美好せん 夏やうらん 唐の路も
駒曳や 岩のりさきあへり のりさき根
あへりあへりあへり
甲斐弱や 江戸へりしと 榎葡萄
彫めや 函谷や うら 越えり 途
重し 梳と画さく
中 梳せん 甲斐のりも さきあへり 三日の月
紙川へりさきあへり

たつら弓矢牙切もや云々然る
池水も七ふ尔あり霄の月

言并可か也連の画子

傘持ハ月子後々々すうこ也
小くくうりある此月や明石信

水想觀の弦牙

系出々々先地まのありある此月
後々々々時宗起々々々のを

あつこあつ

更々々祢宜の斬や杉乃月

月出々々望みり々々小舟うな
宿々々々東城々々や々々この月

維摩の讚

山此こい大衆なり々々床乃月

張良圖

宵中の兵い々々子々此月

布袋此月を掬ひて

有々々々々水の月々々瓜はり交

閑倚橋

猿這ひ子系々々々々橋れつ

寺にゆく葡萄膾ハ 羨ふ子のらん

小野川掬子餞

八月や琵琶と笛ふるをき先ん
あかきく猿の歯ふし山峯に月

契不逢恋

国の方牙ひのふ坐臥や社の方を

病中制禁好

橋桁の串海風とつれや月死友

遊子

いさなな松の海もいさなな月

夕陽や弓弛放るれく 昏乃月

玉津島帰望

つこのみらの更井に月を蒙るこのれ

燃杭より火をうつさやんき月夜に

庖丁の片袖くくしくくのそと

月のさそく詩の舟く山市く川武く

長柄文臺之記

のふ月もむのしに橋を掲目このれ

仲磨画賛

月影や舌を帆子まなく 三かきやう

月をこのれ越路の小者木更の下女
ろ子なりぬ波子米守るる康島

満百

あり阿島の岸尔なるり母死乳
在明や待おなるうう能君と伯父

所思

いさくも心はくしや十四日
待宵やめりき二見へそと者見
本母と有り方の會ありきうのう
烏帽子屋ハ急海しきくふもあれ月

下
下

雨

狗とめく金買部りきぬ乃
川とちるる屏屋ハく川くあめ月
納屋子何雨吹を控てけあつた

合秀真

富士系入日越を輝やうあめ月

琵琶川をよむ

十五の酒をよむおくき婦の月
所思 多めく

いさくも心はくしや十四日

夕汲をとりえて見ん如もぬの月
朝も花も江戸子生れくまの月
ましくらや年のいさねもあひくまの月

文畧

位深めも老る子ありきやれり
酒くさよ鼓くちも架多ふのつき
海素子の弦子
おりの事あまきりし誰月見舟
得蟹無酒
舞の画くうきぬ這をふらん哉

人言や月見とぬきふし草

風雨

雷牙揖ハなふ交そ月見舟

布袋の画

月くもも杖可つあけぬ小舟ぬ
平家落の逢風尔
宿たろしれとく被く切し月見哉
て何るん子丸盆おひく月見果た
一休の狂詠自画を写して
律師沙弥お判哉くま月見の形

上交語上

平家なるを太平記の八月も見れば
娘みも丸まを〜能を月見の乳
僧と出あは〜
小便牙起るも月哉 又さうり危
名月や身その〜人子松せん〜事
名も〜やあ〜住吉乳 法く田志の
名月や居酒のまん〜頼り〜
名も〜山や床を〜〜
名月や金〜〜子の 百世の友

名月や〜〜〜〜
三日糧をとつ〜
めいも〜や十安子鉄を握る〜
柴あ〜〜
名も〜〜
めいも〜や人を抱手〜
鐘 壺 容 船
めいも〜や席堂の大鼓の〜
名も〜や志〜
名月や〜山を〜

閏十五夜 前の十五夜江戸より来た
海番危に照月をえんく後河上舞
待乳山
とぞ満里掉ちんふん千の鳥
松前の子やあつる
一さ吹く大根くもさく月
宗回先月をう家の句をとりく
芋ハシ 凡僧知ん 二百貫
君といひきんと云とて中なるあつて
抱ふし青豆うらと 袖きんつる

いさゝかひや竜眼肉のあつては
十六宿の儒者と必きく婆あり
あつての童子扇とてさる画子
桑守の心ゆれとや 栗の片に
山川やまを急子 越とてさるの
みの栗子 袖るきの櫛のたけい
栗を賣の云関への家 雲をく
あつての上は後き子 長太郎子
三栗のうとありうとや 角 被
生栗を握つては山 踏る

如是早のこつ後を

二子山あつこ子むらうを栗のうら

泊瀬女牙村の志ふさ銭思ひきり

栗差我遊吟

法庵や志ふ村さるもあつこ

露香月灯を憐

古寺や淡路のふまんとつ後さ

後府出番子接立あつこ

たう入糸銭拭こもも木造桶

所所柄やうの運こももけさの霜

同来のし推ひお里おん松巻ふあり

月日此粟嵐葡萄あつこの甘露有

子菟の袖此巻子のりし白ひくれ

南天やあつこ実海や此山のたぐ

南てつ実実をつ免とや雁巻色

南天や煉炭のうへに小倉やま

子をきのことあけく夫婦子

ありあ巻ハ思ふ葉子とん秋菓

種竹三竿

味あつこ許由うひきこまこあし

茸や内幸のあはれに眉つくり
茸精や山志阿あさ子虚骨病
たきつりや鼻乃先ずおあうり
松吟尺の庵子さこの燈の土をわり
うつしと落す松あともまゝ有り
りくちん中ふ志海初け有
りそ志そ都志土や末乃子狩
松の香そそと吹たりはく茸
鳳来寺の山北志とさる能
冷泉の珠敷りつすきる茸あは

松の系糸とこれ火先あき落葉油
川苔此香牙あうりやあま水
稲葉見子女待そんをうり川
ひよこくや穀をあまれ苺菜の中
あま基糸稲下も志そ手織り乳
いつしうやひよと干んぬや天井川
稲塚あ戸塚あつり田守の那
あはとやの甲うりそく落穂哉
早稲酒や稲荷とあ出寸姥りのを
足あ少お亭主糸とへく新酒かち

太郎二高の貝とさつてく

かき出せん貝ふりくち守新酒式

横儿追悼

一漱を手向牙とちや 新 糍

とこ一をやとれましくせん其言麦畠

種茄子 北斗をゆふひのり式

茶のうきき吐志せし後や新豆腐

生孫と系雨雲とちね生約山

阿保とち鹿もみくん鳴子曳

七十乃腰もそくすくたのこり

雞の下養つてきり宿のきく

いまぬきの庭や籠摺菊のち

手のうちを敷つれくちくの雲

駕糸ぬきて山崎の菊を云鳴り丸

志やしとまき具何ある菊は宿

北荷うら従者短冊やしつるに

去器の手きくんきくやちの菊

きあのきく小僧とちるおはき好

きくお香や瓶より阿保水年迄

お新や其基石ふちうねく乃る

雨をきく地もこの菊を先におん
こゝ誰子の影をうかす心なき

昼菊

かくかく答へ後よりか舞う身

素堂残菊の會子

此より十日の酒を真主あり

紅葉

葉をさきり阿とあつても物のみ

病起 千山より菊をたぐ

大母衣のりし後我押や瓶のきく

三鳥牙と重陽

門酒やるを此のころ紅葉をさ

宮川をゆるり酒送らきりれ

重箱の花をさし菊の影を菊は

みちをのり乃るみちをのり

いづれ我七百法師走 菊牙入舞

花のやと菊のたのしみ

出世者の一りや由りは菊

時服を葉をさきくやん芭々

子と菊を歌人此名字志のこ

袖の浦とつゞきつゞき
白菊哉貝珠実尔きん紐乃ら
花をさきくゝ西行の圖尔
女の子哉ねらひくまうけらる人尔
か子屎尔ららるゝ花せん妹の如
親を爲十日のきく哉のひらり
震真の跡りもかきな菊 贈
未曉 陰
鏡つゞきよ此子に立くつゝる葉ハ

翁とひ葉の交む所 任をくり
筆電多のゆれきたにうやうや園の菊
子家の落大百菊の餘情
葉らやまきく亦詩人の質をくカクキ家
柚の色や起あかりの葉の葉
きく此酒蒲菊のうら子志くまらり
内菴風虎と十三回忌
菊の香もたつたをえぬ好服さくし
九月九日扇を指ひる家入尔
きくやつゝも星より輝く礼あつた

菊花餞別

友成身兼茶師使平橋廣まき
手入のちまうし酒系端々むし菊

産寧坂くさうを

菊紅葉多き途跡ともちのり危
流くのち水やほききく流るあり
水鼻平くさく免なりけりまきく 施

丑と月見をうり

深く神ねい雨元政の十三夜
うきくさや江尻く三穂乃十三夜

志のそとむ茶師兼松森の十三夜
茶研ても粉吹おろすは月
後流る上のお子も雨夜、形
のら乃月確をきこて日傘
白鷺の甚衰ぬくやう尔後の月
いつまも古のそとを

後の月松やさぬくし江戸松屋
さうし子をふくくや後の
家こゝろの木まもるし松ち乃月
橋むしの身と栗平鳴と雲く乳

住の邸や春芝花をて浦花月
白玉可等成と文くも滝内つま
やうも月秋を扱方のき木挽早
漬蓼の種子出る月成み給る
笈乳菓子古くさまよ月見成
白遷宮の良材とを花まうく
大工建の久しき顔や神共味
御新子あうく奉りそ
市穂をうりて扱あるまのかがり
内宮法祿の遠拜なる余

月の秋や赤子もまのれ神踏山

外宮

日ハハと種と古殿を馬力のあつん成
ちくや小判ちうんく菊の花
毛津川みく
赤もくも祭主の輿を送り
二月堂子系りける七日断食死僧
堂のうさく行ふ声成す
日の目見ぬ帟帳もてん拖の那
かのちりく髪を簾子掃くおる成

戸越山庄

むくみふふ北征の美とほくく白く乳
谷へのあも蒸みまゝの紅きふかり

三条橋上

片腕のみやここのこすあふふふの
りもちみわたるをうんく酒のかん
山姫せん傑うく流をくまをちこれ

管根

杉みくへふるそふくまふ村ぬふ
りもちんふふ公家の子達うたふき山

そと役なり紅きふくちありさうの
のふくくと胡熊の柘といふれり

大山

腰押やあふふ岩根せん下りそち
山あふくくうねくく面や神をく地

新殿六間港

あつこのぬ蒸土のうく免や下紅き
年のつとれ世やまのつて岩まの
本葉の食 蘿を扶せんみしきか
この風情 狂言ふもく 葛みくち

う川の山入弦子

爰の角栲せん葦の月あつれり

霍々岡古樹のりやんく

ありし代の供奉の扇やちる銀杏

遊弘福寺

木犀や六尺四人 唐 糸のり

うら枯や一も餅くふう川のあま

餞お長上京

うらのまこ花のたのめや女お純

白扇倒懸東海天とくく句とつこ

は頂有り射く子子極くおんちき

ふ雲の西平ゆゆ魚や音賢不二

洞房の茶屋字兄生お笛を好く

うもさる誠悼く

さやんや笛おめ子き 塗土足履

見し月や大くことお純く 九月 尽

吉野山ゆききし

頼政お月かんこくお純く 九月 尽

怨国離

傾城お小あをこのあく 九月 尽

丁鹿虫とてこのつらさくく我より善

九月尽

藤姫お松月方のうま妹を師走か

見守り御女大いにお給へ 廿日
さくらさ 御女大いにお給へ 廿日
同右の御女大いにお給へ 廿日
同右の御女大いにお給へ 廿日
同右の御女大いにお給へ 廿日

冬之部

神無月あつた花月まの寒さ
高砂や祢宜の御治の神無月

玉津島あつた

高野あつた

高野あつた

卯塔あつた

東戸六祗園あつた

揚弓子あつた

神也松酒匂を橋し葉子多
家々の留ま居るなり大社
あまきけと時をくす頼乃鏡の
際かす寸片日ありやむりし
志くくや葱臺まゝのし柳

遊金閣寺

ハ夢か楠の板戸残りまゝこれ
葉をそそぐ際をすめ夕時雨
むく志く連三端の近きまゝなり
釣橋も夕日ある北志く連

芭蕉病床

吹井も中し鶴もまひらん時多
細猿の列系はくふ志く我う乳
時多の疲松私の物下あしにかきり
時多の山をふるにあり酒のえんより人子
あく我も酔やのこりきむくく
當麻寺菓の院もく
小おきくゆくとあふ山にたう
松原も現る息を志く我う
三天の所残西行の志く連

本多総州公子侍坐しける松村雨に
 ひく蝙蝠の鳴き聲をきくありぬ
 楠橋や柱を拾ひておしきく
 守山の子子りり談言日語つゆ
 ありんらんらんめき花むすむ
 采れぬれ朱丹さぬくくき
 針つむくまこくおありし雲丹の
 今態を志くくく阿の
 國阿の能
 糸山は是訪ゆくく時雨の那

三十一

志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる
 志くくもて人もさぬ出を能く
 崎むぬく茶談中一物志く
 松系のすまふもつんたる

同年忌子三句

辰霜や 鳳尾の印志 其れよりも
遠くふや 自利子 ころか 水より見
久き畧

爪牙世牙 むろく せぬみ ねみ ねみ 栗
このししと ちりぬ 龍牙の ころき 目
ちうししや 沖とん ちんきん 山 死きれ
爪牙 氷の 氷と 氷と や 狐 志 尾
木 枯や 樹多 此小 橋志 志 志 も 端
出翠 十と 幻 後と 危の あと 此 志 志 志
し 痛る 七 すす ぶ ぬ 嵐 乃 木 志 志 志 志

志ししと せや けり 枯木の 夕つく日
あしひ ころき 二井の 二王や 冬木 立
冬木 立い けり せしや 山の たつ 志 志 志

西遊山の 志 志 志 志

か 戸きん の 尋常 可 死ぬ 枯 跡 志 志

画譜

松一木 と 食の 松 志 志 の かせ 志 志 志
捨人 や あし ころき 志 志 志 志 志 志
色 蒼 志 志 志 志 志 志 志 志
冬 かせ 志 志 志 志 志 志 志 志

三日月のをくらくははる可き諸式
何葉の葉ゆく市流頂戴のくさき子
おきあの下納もあらんおれこうれ
おれくお祀文おるよ 枝折お
くられりの代ころあのか子うりお
帰花を種もを志らんむしるきお
生時新の節上系
練の木乃扇弓くおちる系多りお
坊主小を清小多系坊主と帰花

口切やうらうらおと片 線苗維菊
燈篭や汝試るよ金 死る子
釣魚の志又七十の契子
お川流浪とくくお 相火 桶
埋火に南風きりくおりくお
くく火牙井やく人き 煮き
埋火や 土蒸のきくおり清
閑居安慰心
魚くおの短式 跡さぬや 所きく
麻あけおや巨持命くんのさあぬら

火燧のうゝ藤替子志業を枕と
月防とのちたあふ人めく海軍行
く子一生非なりひあきとめく板倉
そのし中々やひ中々鉄板指ひ
あつ列々青紙と錢とあつひ
松うもやけ子富士と號西谷
侘子短く一燧の散茶味味
さるひさひさるひさるひさる
片子打落したる火鉢と幸此花
忠度と所りの神く火鉢のま

あもあ度しひし子対志く
炭く子鏡のぬあく手指
ま〜焼きひさるあ〜ん谷のま
炭竈や鉄木龜井、朝此
炭賣やおおろやん清水鼻を
す〜か〜煙波ぬきえ、猪の
か〜山原もそれ木葉より
炭屑平い〜あ〜ら木葉式
新宅
舟の場乃小倉船〜山原

さておちかの一車 ちれおん
茶の幽居 炭の黒人を 佗名之
蛇のうらき目を益めく 都多と
名つふり 多りくき
炭くつら 炭こそとまの連と
志炭割る 火箸を 芥世の 幽なる
表えひふ十九日 一くく好なり
大里のくせくお家めく
酔さくくく大黒出ん 夕恵ひさ
まね板牙小判なきく 夷 講

山差我山や 都く酒まへん寸
打溢牙 飯もあはれ笑う
法香子 先僧春色く
源氏もや 季吟の家此 蛭子 隣
福天の床机 牙と家め 仕切帳
子ハ衣碧 親無くつ子なり 夷 講
幻何菴可く
新巻
崩の山屋あておのく人 冬 心電

落のたりしを根う急めをみかま
はくしとぞちん 兎やふゆあり

霜月朔日の例を

徳大や嵐芝の夜 冬こもり
顔えせぬ 暁いさむ 下郡橋
何ゆらん 藻魚いさふ 冬きり
采さぬ 二冬ちりれく 糸巻夜
帆かぬ 船あきや 堅田の冬きり
此本戸や 鎖のさしれく 冬は月
山多し 舞あめり 糸巻月をく

大城見ん 冬は海へ ぬき夕納涼
冬川や 筏走すり 糸巻の原

住吉あそび

甚き糸巻を 冬きり 流とや 冬の例
情あれて ちりり あり人あつた 蠅
冬 立 厩
冬持の 足下を ちりり ありと さま
冬来く 糸巻山子に ちりり 鳥と 林
舞あそび 孩子の ちりり 糸巻 弓
縫う 糸巻 糸巻子に ちりり 糸巻 糸巻の 冬

むらうせし一窓の重幕や孩子夜着
紙子着てわらぬ傲もあり大井川
ありこもくくくくくくくくくく
目とこのりききまの頸巾の浮世うら
胡あし馬の目くけつきん哉
あまのゆく事志きよきも足袋改巾
持人きくめお切くく火おく那

大町新巻
水仙や鉦はくくの小嶋基
多仙可あ解分ゆめ星くく夜

柯求老人の手向

山茶花や猫の糞くまお蓋のの

對友

肉の古酒をねくく如室た素
困りり大くめくきりむろのう純
胡鮮せん妻やひくく海紫人參
玄賓をせよ見能はるく干菜賣
市原場ふる休めり大根ひき
お沙どのハ先と解く人と大根引
日本の風呂あきとく比叡山

雲の刈 舞をさのしやみあふき
かふけやあふのうらもると朝のまに
秘きうか 鶴北かきもや筑戸計

文畧

茶の湯めらゆつとあふひれとけ
あふの雑味あふき配る納豆汁
碓つまでいふあふ森えや納豆汁

上遠水三十五日

あふふかばまらぬ神哉納豆汁
つと孫有 鬼の耳と引たくと

金彦のあふきとくうぬる霜の声
髪のをお木賊あふ一夜拵牙より
滋楽憐の火洞あふあふおのあ

貞佐新宅

此宿と市師もあふつひて杉乃霜
酒くさね蒲索利きりあおのくさ
妙身童女と葬るる

霜の鶴土屋あふんも被さるる
宗隆尼みふらうとあふ
あふ子逢ふうとあふ命やせくの霜

群のさる乃 寂然尔提のきくけりん
鉄鍬治牙 隠者たのん 細の雲
その雲の何しおらうそ 舟の中
不草の雲の かまじき雲や 水は雲
播州の傳とりのそ
栗めしの魚く 白ふや 霜は雲
あまの雲 かくまの雲 雲の蟹
山火とるう 雲の 志を雲の雲
曇りたる白ふのころや 雲の雲
ふきくをれ 終の雲 七日 市

みと種も勇ハ万ふんより 浪せん雲

宿僧房

あゝ雲の 閑伽の杉の 冬雲
名次へあゝ雲とくく 長柄の
武雲の雲の雲の 雲の雲
海へ降る雲の雲の 雲の雲
みうれく木雲の 雲の雲
市川三升と祝す
雲の雲の雲の 雲の雲
滝幅や雲の雲の 雲の雲

閑倚橋

うひくひや鏡長あふれ橋はくは
煮凍や 責子あふれ
長屋刻付くまじし人志まのり
酒賣不許入内くまじし
水乞の綱もくまじし 水柱の如
柳多く弓多き越のしの憲清なる
爰あはれ多し隣家子信をかくる
たゞあらの城乃ふは如吉野山
使者ひくく 出遣人通家さあて成

父の医師をあれし戯し

純汁はまの本草のし形しあれ
河豚あふれ水死あふれ如下河原
人妻あふれ大根あふれあふれ汁
生薬をあふれしあふれあふれ汁
世中不 舅あふれあふれ 河豚あふれ
あふれあふれの浦あふれあふれ
純汁はあふれあふれあふれあふれ
あふれ汁や祝言のし能あふれ
妻あふれあふれあふれあふれ 衣

鉄炮のそと種と知くやあつと汁
 手と切くいよくあつと種と面
 詩人ゆきを松江の飯といふん
 後子より春し更子ありす雪の飯
 舞鶴をとりきけん運ハ厨の那
 足袋よりやとむるまをれと子
 蛎のまのやとあつとあつとつと
 鯉のつとつとあつとあつとつと
 梅津某秋田へなぬがと送つた
 志より春し更子ありす雪の飯

細代より大根ぬれとととととと
 阿久根やア久根屋せん
 後無曳ぬれとととととと
 大川より豆腐持ゆり甲新無
 給意松糸一の糸や三穂の海
 市隅の佐人
 宮某屋よりとととととと
 貞徳三羽五十年忌
 常とととととととととととと
 霜月廿七鳥候干黄門光圀卿之末茶

真題周山之佳景

硝子の遠茶屋

水の工と醉龍津 水茶屋

清水寺音羽

振精舎 梢や子と花 玉衣のり

耕作の遠茶屋

根深く 麦の早苗や河もえん子

黒木の遠茶屋

我や紗半牙 雲咲 黒木茶屋

藤棚

若昔やあゝ種牙ややろ不破庇

西行堂

炭や岩間あつゝの法あそくくと

唐橋

長橋やせこ子あひんあふく松

八所一の志乃うぬきを死く

坊主かきと月あも涙よは川水

何系書院

八子代くそ河系法鏡せん浄子多

西湖

詩と阿ふふあつらん 享の標小舟

右十章

越後屋の鼻程とく小舟ちり
啼らるるくぬぬのまのまの
むく子るるくぬぬのまのまの
心もや全牙ゆぬぬのまのまの
浦子多しぬぬのまのまの
志の標ゆぬぬのまのまの
とまのまの月ぬぬのまのまの
妹の手ぬぬのまのまの

大丸講月次

仲の帆も十のこもぬ 濱子鳥
水舟も蓋とらよ 鴛の中
十石も鴛ふはくぬり 鴛安
滝口やおりのぬぬも 池の鴛

夜学感

鴛舟も萩や蜂蝶 燈蓋子羽を困
初巻の外子鴨の毛を引紙ん
鴨の毛や 鴛の衾せぬるあけ
志海を乃猪も波のこも先式

燕一重くつらや乞食のぬくえ鳥
めつれしや鷹うらぬり對る船
高きなる人よ薬内しく
高深く急ぐ船尻あけく船を
町并木店太のひらきとあつし
ひらき常れちのほあし思ひを伝く
た連しぬる縁組らんと里并木
新神楽や鼻息志ろく面のうち
くつらや犬のつら出尻杉甚
神堂牙は小便無何や川橋

智恩院町ふやうりく

ちのねまよふ志音くつら乃妾の子
神を平人ものねくつ伏んあは
は川雪や赤子平とさる朝朗
初雪やサ佳乃扶持甚小玉器
ちのねまよふ益赤り人よなめ哉
神堂やうらちよぬらう人き能
あつれしやそれ降ま守城さる春
人よあぬおの獨酌
ちのねまよふ十はちうら子の満のかん

或は方より立ち入りてゆく世のふるよまを
物もなかり物やえくく物く多るまや
楠の銅壺四間子一房とてや百客の
唇はくまはな
さしやゆゆのし所志の 大銅壺
市中閑
はら雪や門牙 梅あふ夕月くれ
雪買子一雪をくはくや 物ゆれ 雪
清水修行子とてふこと
かしのしたき雪の舞下巻の日の気を

雪は日や船頭さのく 静かむ色
る士牙 雪くまのちく 雪の宿
寒山の賛
森る思子 門の雪くくとも良 かな
ふふく おりく 睡く 雪のく人
門のふ字をくはく
馬より炭くくくく 馬くまの心
くくゆくくくく 世波くく雪見哉
色意くくをくく
表老い 竹魚も 竹魚に 竹魚 みる

官城御普請奉就しく詔家尚慶美
孫のりふ家以

陪長冬朱買臣あり 由承の袖

東山冬の傍子

雪が波く積る茶と煮る大田寺

かみ川舟ひも進しをえんが

新迦しよふ改も雪の黒木くれ

醉吟

雪のりもや雪のりもよしのすふ忌衣

戸障子の雪を雪と松たふこゑ

望聖殿山

薦ゆもかや大枝字括糸山の字

かしくもや麻田へのるる雪だるま

遊女土佐をむのり人すくく如て

黒塚の雪あしらひや園の雪

りやまも川もよもりめく

半袴の四時毛ありや雪だるま

鴨川も鴨と鉄輪舟雪だるま

軍兵渡山登てまのりや雪だるま

まのりの雪だるまはらる乃下り危

前よりよ字めく二重の句

叡覧の大糸ちうりくもりの雪

出口少く

さぬくは火張るうみや袖れ雪

すくはるうみや小糸を白れ歌はて

おのめや捨くあうくくゆま乃く宿

腸張塩牙さけみや雪れ猿

温飢屋へゆく念佛ちうり夜せん雪

文畧

思涙をまろくあをぬり雪をんぬ

三十七年

埋木せんぬしみ勝手や雪の友

雪の月とあそりううふ思木れ

針爪の相のかみやうう雪の御意を

きくく了簡きぬきききおのひ

佛子と討ぬまりのくかく世を麻ねま

極めぬく浅間ううくくくいひ

汎妙くあはるるありぬあくの雪

青際哉雪れ裾那や丸合 押

一富士うつあま田ハ雪れ早苗うぬ

あそん茶の詩さこと盧全ハ雪の自ら

抜出しくゆきおはしふ柄ゆく
雪ありのうねのかきみまみそ
秘蔵の糖のまらふ酒の味
黒染子ほ吊や 雲うら
朝あもや日さうとまの酒の味
雪にましくかきみ蘇鉄の女あり

雪窓

損料の史記も師走能常う菊
雪出し何と酒走の巻 柱
妹年あ師走さ菊もまらけ

大小の嘘

元禄十年

大庭と志^四海^六くは^九霜^十師走^式
益あつうの小坊主^子と師走^十志^式
妖らう^々狐^々志^々師走^々志^々
不^分當^春作^病夫

酒ゆ急し病をさう^々志^々師走^々志^々
新堰あ^く食^く志^々師走^々志^々
雪か^く志^々師走^々志^々
山陵の^々志^々師走^々志^々
子^々志^々師走^々志^々

こしくくみ麻屋いやししそらたき
 伊勢橋をよせぬと満と 鉢 鼓
 あつ川又の筑波ふらや言しを仏
 寒念佛 抄をよむれそあつてつも
 酒飯志 飲酒をいの子かん物あつ
 南詔年あそくは時
 冬ふゆや 南大門を 水は月
 雪りあひひくこの灘や 冬造り
 極寒
 さためあつ送精もつし寒あつ水

漫成五倫

君臣有義 家の子若くよとさつち年つとれ
 父子有親 純けや情を 嬉ちちあつて
 夫婦有別 絆打めをととあぬもあつて
 長幼有序 そのるよる娘の子にも猪う那
 朋友有信 君とあつて子あつて志つたれ
 極月十四日西吟大坂へのあつて
 つまや 足袋賣子あつては山
 節季のやいさつちあつてし
 元日を起とやうあつて 節季の

高季八左能耳尔あるや
蝶々ふく麻の教を女房めり
さくさく山勢と佳く世持
多きめら志く紙紙巾やす
忠信、芳野志まふや 煤 拂
困窓子羽帚とめく
蝶二つりつるれく入志陳皮の事
鼻洗掃孔萑孔玉や蝶の事
唇く助子やす
さくさく也 徳人、まひる 繪 踊り

雪若多めり餅はあうと我を鳴り
餅ころりや灯たてく 確也んかき
りち志や風、目有まきく 能出
餅と尻と宿へきくく 事そあま
震威流火志の事して
妹々子や薑さきくく りちの番
女子疱瘡く多家家子能んとり
餅の粉や花雪うり 神乃咲
弱伝沙くろ門也れを 解也ん 札
く、お布誰をとららん 解折とめ

桑と松守と市に夕阿し
新荷よ中るとの身かられ免
行露の一方句は無の巻油
第代のメ成阿也免神楽帳
揚谷子酔房して
恵の年差紙の亀をささくきり
詩商人年紙貪ふ酒債の如
いさくらん年紙酒屋の上はたまあり
ゆきしも板戸めくし餅の徳
ゆきくも承唾とらん鏡さる

座右銘

行年や壁子くまらふ家そんかき
ゆきやも俗評定教明土く
やうくまらふ又や狭造くゆき
行幸に年あふくまらふ年乃くま
小傾城ゆきあふらんぬくの昏
旭朝屋の夕日志のまらふ年此れ
子流りまらふ形久きぬくの暮
千観世のまらふまらふやまらふ乃れ
年中の放下みくまらふ 年の昏

くも波弱くくはくくく堅田の由り
伊賀れちくくおのひのおよありありを
くもくく山をりくく年中をいす
おまのくく後れ小文やし年のくく
流くくおふ手臨れ戸のくく
おまのくく年れ哀せつくく
年の影やひくくおのむ終のくく
臘鬼五つの子を産り樊中よやく
きくくお州よかけんをくく
年れくくく 鬼り親く 焚く 満く

下
廿六

後州久能の別當さんはめじく
おしくくおあ年男お 旋すくく
豆くく川おのくくある 笑か
三升西持鐘植の自画賛
今ま子園十郎や 鬼を外
乾元の節分
長ぶおのきくくくくし得方丸
おくく越やくく業平のは神ひき
お中物の中子眠況く
年れくく連刻伯倫くくあふく

大正九

五七

若うの

乳母あつて志このも美女あつて
 午山宅あつて志
 刻すそやハ乙女神楽男あつて
 市松舞より破戸あつてか
 誰のあつてあつて大夏あつて
 大晦日あつてあつてあつて
 聖代あつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつて

下 五七

